

## I. シリアの紛争において、アサド大統領の三選はどう解釈されるべきか

青山 弘之 (東京外国語大学 教授)

6月3日の大統領選挙でアサド大統領はおおかたの予想通り三選を果たした。2011年の「アラブの春」波及以降、その崩壊が「時間の問題」とされてきたはずのアサド政権が三期目を迎えたことは、シリアにおける現下の紛争においてどのような意味を持つかが解釈された。その際、シリアの紛争が、当事者、争点、手段を異にする複数の局面からなる重層的紛争であることを踏まえ、「民主化」、「大量破壊兵器拡散防止」、「テロとの戦い」という三つのパラダイムのもとでの大統領再選の意味が具体的に明らかにされた。

大統領再選の意味を解釈するに先立ち、報告では、まずシリアの大統領選挙にかかる制度が、2012年の憲法改正前後の規定を比較することで紹介され、今回の大統領選挙が、大統領資格の厳格化、選出方法の制度面での民主化の2点を特徴としていたとの指摘がなされた。

次に、4月21日に告示されてから6月4日に投票結果が発表されるまでの大統領選挙の経緯が概説され、立候補者の経歴、選挙綱領、得票数などが紹介され、有権者の積極的参加、避難民らの阻害がなされた実態が明らかにされた。

続いて、シリアでの紛争の主な当事者が大統領選挙にとった対応が、積極的参加、消極的参加、両義的関与、という三つに分けて解説された。選挙に積極的に参加した陣営においては、アサド大統領の対抗馬として出馬したハッジャー議員の陣営をめぐる分裂が紹介された。また選挙に消極的な姿勢を示した陣営については、在外投票の実施を禁止した欧米諸国の「非民主的」対応が紹介された。そして両義的な姿勢をとった陣営については、西クルディスタン移行期文民局とアサド政権の戦略的な関係についての言及がなされた。

最後に、アサド大統領の再選は「民主化」、「大量破壊兵器拡散防止」、「テロとの戦い」といういずれのパラダイムにおいても、積極的に推奨されていたわけでは無いが、事態のさらなる悪化を回避するという点では現実的な選択肢であり、それゆえ紛争当事者の「消極的選択の総意」の結果だったとの結論が述べられた。